
大きな彼女

レン太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな彼女

【Nコード】

N3380L

【作者名】

レン太郎

【あらすじ】

彼女はスタイルは抜群で、顔立ちも大和撫子を思わせるような、日本の美人。気立ても良くて優しく、僕にはもったいないくらいのいい女だ。しかし、残念なことに、彼女は物理的に大きかった。

僕の彼女は、とても大きい。といっても、太っているとか、人間としての器が大きいという類いの話ではない。

彼女はスタイルは抜群で、顔立ちも大和撫子を思わせるような、日本的美人。気立ても良くて優しく、僕にはもったいないくらいのいい女だ。

しかし、残念なことに、彼女は大きかった。身長は十メートルほどもあり、街の雑居ビルと肩を並べるほどの高さ。ちなみに、体重は女性だから内緒にしておこう。

どうして彼女がこんなに大きくなったのかは、謎に包まれていた。付き合った当初は、身長が百七十センチの僕よりも、幾分かは低く、普通の女性の大きさだった。

しかし、ある日を境に、彼女の身体はどんどん大きくなり、仕舞いにはこんなにも大きくなってしまっていた。でも僕は、そんな彼女を見放したりはしない。

僕は、彼女の住家を確保するべく、田舎の両親を説得し、実家の壁という壁をすべてぶち破り、彼女の身体が入るスペースを作った。両親には当面の間、ウィークリーマンションへ引っ越してもらい、彼女は僕の実家で、僕とともに暮らすこととなった。

次に、衣類の確保である。当然のことながら、彼女のサイズに見合った服など、どこにも売ってはいない。ためしに、大きいサイズの店に立ち寄り、彼女のサイズを店員に告げると、

「どんだけ大きいんだよ」

と茶化され、まったく信用されなかった。まあ、ダメもとで、そ

の店にある、一番大きなサイズのスカートを手に取ってみたが、彼女の靴下がわりにもならないようだった。

僕は、近所の手芸店に訪れ、洋服の生地を大量に買い込んだ。店の人が、ア然とした顔をしていたので、

「ちょっと手芸に凝ってまして」

などと言い、お茶を濁して、そそくさ帰宅。早速、彼女の服をあつらえるべく、僕がデザイナーとなり、彼女の服をコーディネートした。

二メートルまでしか計れない普通のメジャーを、彼女の身体に何回もあてがい、サイズを計る。彼女は今、縫い合わせた布団のシーツを何十枚も身体に巻き付け、恥をしのいでいる。早く彼女に見合う服を、着せてあげなければ。

しかし、こんな大きな彼女の服となると、何着もあつらえるのは困難である。そう考え、オールシーズン対応が可能なジーンズと、長袖のTシャツ。そして、羽織るためのカーディガンを作った。もちろん下着も忘れずに、彼女のイメージにピッタリの、白いレースのやつを用意した。

「ほら、着てごらんよ」

僕の言葉に促され、彼女は巻き付けていたシーツをほどきはじめた。縫い合わせた何十枚ものシーツが、僕の頭上から降ってくる。僕はそのシーツに埋もれてしまい、出口を求めもがいていた。

「どお、似合うかな……」

ようやくシーツ地獄から抜け出した僕に、彼女が言う。僕は彼女を見上げ、真新しい衣装に着替えた、大きな天使に魅了されていた。

「似合ってるよ……すごく」

彼女は、はにかんだ笑顔を浮かべた。やはり、僕は彼女が好きだ。大きくなっても、彼女は彼女に変わりはない。

僕は、彼女の差し延べた手の平に乗った。彼女は僕に顔を近付け、キスをした。顔が彼女の唾液でべっとりと濡れてしまったが、僕は顔を袖でぬぐい、彼女の頬にキスをし返した。

深夜になり、人がいないのを見計らって、僕は彼女とデートした。田舎ということもあり、周りは田んぼや山に囲われていたので、都会のようにビルなどの障害物が無い。僕は彼女の肩に乗せてもらい、辺りを散歩した。

満天の夜空をあおぎ、彼女の顔に寄り添う。すると彼女は、目に涙を溜めてこう呟いた。

「あたし、ずっとこのままなのかな」

「な、何言ってるんだよ。きっと元に戻るさ」

僕は、言葉に詰まりながらも答えた。彼女が、元に戻る確証などどこにもないからだ。

医者に見せようかとも思った。テレビで世界中に訴えて、彼女を元に戻してくれる人を捜そうかとも思った。しかし、できなかった。なんだか、彼女を見世物にするようで嫌だったんだ。

でも、このまま彼女を、ずっと実家に隠しておくのも、違うような気がしていた。

それから数日が経過した――。相変わらず、僕は彼女を隠していた。昼間は家に引きこもり、夜になると、散歩をするという毎日。そろそろ、この現状を打破しなければと思うが、なかなかいい考え

が浮かばない。

とその時、テレビで信じられないニュースが報じられていた。なんと、地下から突然、怪獣が現れ、暴れ回っているというのだ。

自衛隊が出現し、必死の攻防を続けてるようだが、まったく歯がたたず、この国は、今まさに危機に直面していた。

いつになく真剣な面持ちで、テレビ画面を見る彼女。すると、何か意を決したように、彼女は家から出ようとしていた。

「どこにいくつもりだ」

「あたし、行かなきゃ」

「行くなって、まさか……」

彼女はこくりとうなずき、家を出た。僕は、そんな彼女を止めることができなかった。

大きくなったことにより、人目を忍んで生きてきた彼女。生きる意味、生きる目的を見失っていた彼女が、ようやく見つけたもの。

そう、今この国には、彼女の助けが必要なのだ。

彼女はようやく、生きる目的を見つけた。そして、その目的を達成したあかつきには、彼女はきつと、見世物としてではなく、救世主として、崇められることだろう。

僕は、勇ましく走る彼女の後ろ姿を、敬礼をして見送った。彼女の身体に見え隠れする夕陽が、いやに眩しかった。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3380/>

大きな彼女

2010年10月12日02時43分発行